

第5分科会

アプローチカリキュラムの実践 ～小学校教育への円滑な接続をはかるために～

発表者 足立 繭子 (米子幼稚園)
寺崎 仁美 (米子幼稚園)
指導助言者 鷺見 寛幸 (大山町教育長)
司会者 佐々木 満知子 (米子幼稚園)
記録者 前田 香織 (米子幼稚園)
内田 成美 (米子幼稚園)

1. 発表の概要

(1) 主題設定の理由

小学校1年生になると教科の学習が入り、座学が多くなるなど、それまでの幼稚園などでの生活と大きく変わってくる。そのため、小学校入学当初に学校になかなか適応できない子どもがいることが以前から指摘されてきており、それが「小1プログラム」と呼ばれるようになって久しい。

小1プログラムを解消するためには、幼児教育から小学校教育に円滑につなげていく接続期のカリキュラムを構成し、実践していく必要がある。

小学校で行う接続期のカリキュラムは、「スタートカリキュラム」と呼ばれていて、平成20年に告示された現行の小学校学習指導要領解説 生活編 にも、その必要性が記されている。そのため、多くの小学校で実践が行われており、鳥取県教育委員会が昨年度行った幼児教育調査でも、県下の小学校の84.6%がスタートカリキュラムを編成していると回答している。幼稚園などで行う接続期のカリキュラムは「アプローチカリキュラム」と呼ばれるが、十分に浸透しているとは言い難く、上述の調査によると県下の園でアプローチカリキュラムを編成していると回答したのは27.0%であった。

本園では、昨年度にアプローチカリキュラムを編成した。内容としては、文部科学省が示した「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に、遊びを通して学ぶということを重視し、具体的な遊びを例示しながら取り組むことができるようにした。このカリキュラムは、年長児の4月から実施することとした。

本分科会では、アプローチカリキュラムについて問題提起をするとともに、実践事例について報告をする。

(2) 取り組みについて

本園では、アプローチカリキュラムの編成に取り組み、昨年度の12月に完成した。この編成に際して、小学1年生の教育課程を把握するために隣の加茂小学校から1年生の各教科、道徳、特別活動の年間指導計画を借り、小学校1年生の姿を組み込んでいった。アプローチカリキュラムを実施するのは今年度からとし、昨年度の3学期から試行することとした。今回、年長児の2つの事例をもとに、

本園のアプローチカリキュラムと照らし合わせ検討をしていった。

(3) 実践例

① 事例1 「ダンゴムシを育てよう」

ア. 活動とアプローチカリキュラム

この活動は、内容カリキュラムの【言葉2】「保育者が保育室に絵本コーナーを設置し、絵本に触れる意欲を促す。」「【自然6】「小動物や生き物に親しみ、命の大切さに気づきながら世話をする。」「【関わり5】「お互いに譲れないときに話し合うなど折り合いをつける経験をする。」の3点を含むものである。

自然あふれる園内には、四季折々の生き物が生息している。また、園近くの弓ヶ浜公園にも散歩に出かけ、たくさんの生き物を見たり捕まえたり飼育したりしている。これらのように、普段の生活の中で子どもたちは友だちと一緒に発見したり捕まえたりと生き物に親しみをもってかかわっている。

その中で、今回は子どもたちが親しんでかかわっていたダンゴムシについてかかわりを見ていった。

イ. 取り組みの過程

- ・ダンゴムシを見つけ、本と見比べながら観察をする。
- ・ダンゴムシについての知識を伝えあう。(オスとメスの見分け方、好きな食べ物など)
- ・ダンゴムシの脱皮や出産という場面を見て、命の尊さを知ったり愛着を持って飼育に取り組んだりしようとする。また、気づきを友だちと共有する。
- ・ダンゴムシだけではなく、他の生き物にも興味をもち、調べたり観察したり世話をしたりする。(カタツムリ、テントウムシなど)

ウ. 活動から得られる学びと「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

この活動から得られると考えられる学びは、来年度から実施される幼稚園教育要領に示されている幼児期の終わりまでに育ってほしい姿に関連づけることができる。

- ・「命の大切さに気づき、生き物に愛着をもって世話をする。生き物の生態について知り、それぞれの生き物にあった環境をつくる」→「(6)思考力の芽生え」「(7)自然との関わり・生命尊重」
- ・「分からないことや疑問に思ったことを調べる」→「(6)思考力の芽生え」
- ・「友だちと同じ目的を持ち、積極的に取り組む」→「(3)協同性」
- ・「自分の思いを伝え、友だちと折り合いをつけていく」→「(3)協同性」「(9)言葉による伝え合い」
- ・「気づいたこと、発見したことを友だちに伝えて楽しむ」→「(9)言葉による伝え合い」
- ・「驚きや発見をみんなで共有することで、更に好奇心や探究心が芽生えていく」
→「(9)言葉による伝え合い」「(10)豊かな感性と表現」

エ. 期待できる園児の態度や行動

この活動で園児の次のような態度や行動が期待できる。

- ・疑問や不思議に思ったことを自分で調べて解決しようとする。
- ・小さな生き物にも命があることを知り、大切にしようとする。

- ・自分の思いや発見、気づきなどを友だちや先生に伝え、共有する。
- ・生き物の生態について興味関心を持ち、生態を理解したうえで必要なものを自分たちで考えて用意する。
- ・物事を関連付けていく力がつく。

② 事例2 「作品展・お店屋さんをオープンさせよう」

ア. 活動とアプローチカリキュラム

この活動は、内容カリキュラムの【関わり2】「異年齢児と関わって遊ぶ機会を増やす」【関わり5】「お互いに譲れないときに話し合うなど折り合いをつける経験をする。」の3点を含むものである。

本園の年長組は、友だちと一緒に思いを伝えあいながら力を合わせて遊びや活動を進めたり、いろいろなことに興味や関心をもって関わり、自分なりに考え、工夫したりして遊びや生活を広げていく力などが育っていくように心がけながら日々の保育に取り組んでいる。

様々な行事や生活の中で機会を捉え、クラスや学年のみんなでどのようなことをやりたいか、どのような思いを伝えあいながら力を合わせて遊びを進めたりいろいろな活動に取り組んだりする力が育っていくよう過程を大切にしている。作品展では、年長組の作品の一つとして共同制作を製作していて、クラスごとに作りたいものを考え、話し合っ決めて、それぞれのチームに分かれみんなで協力して作り上げていく。このときは、お店屋さんや家、海や山などの自然など各クラス3つずつ作品を作ることが決まり、遊戯室が一つの町になるように共同制作に取り組んでいた。

イ. 取り組みの過程

- ・各クラスで何を作りたいか話し合いを行う。
- ・お店屋さんチーム、自然チームに分かれどのようなものを作っていくか話し合う。
- ・それぞれの得意なことを活かしながら役割を決め、友だちの良さや自分の良さを認め合いながら製作を進めていく。
- ・どのようなことをしているのか、出来上がったものなどをみんなに発表し各チームの製作過程をクラスのみで共有し、良いところや頑張ったところをお互いに認めていく。進行状況を確認しあう。
- ・作品が完成し、頑張ったところや、こんな風に遊んで欲しいという思いを伝えあい、みんなで共有していき、作ったもので遊ぶことを楽しむ。
- ・作品展当日には、保護者の方や年下児に完成した作品を見てもらったり遊んでもらったりする。
- ・作品展後に、年下児を招き一緒にお店屋さんごっこを楽しむ。

ウ. 活動から得られる学びと「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

この活動から得られると考えられる学びは、来年度から実施される幼稚園教育要領に示されている幼児期の終わりまでに育ってほしい姿に関連づけることができる。

- ・「友だちとイメージを共有し、作っていく楽しさや充実感を味わう」
→ 「(3)共同性」「(10)豊かな感性と表現」
- ・「自分の思いを出しながら、友だちの思いにも気づいたり、折り合いをつけたりする」

- 「(6)思考力の芽生え」「(9)言葉による伝えあい」
- ・「材料や用具の性質を理解して工夫して作る。」
- 「(6)思考力の芽生え」
- ・「役割分担をしてみんなで作ったり遊んだり進めたりするおもしろさを感じる。」
- 「(2)自立心」「(5)社会生活との関わり」「(6)思考力の芽生え」
- ・「年長児としての役割を意識しながら年下児に優しくかかわったり教えたりする。」
- 「(2)自立心」「(5)社会生活との関わり」「(9)言葉による伝えあい」
- ・「遊びの中のルールや約束を守って遊ぶ。」
- 「(4)道徳性・規範意識の芽生え」「(5)社会生活との関わり」
- 「(8)数量や図形、標識や文字等への関心・感覚」

エ. 期待できる園児の態度や行動

この活動で園児の次のような態度や行動が期待できる。

- ・考えや思いを伝えあい、自分たちで物事を決めたり解決したりできるようになる。
- ・役割を決め、協力しながら取り組むことができるようになる。
- ・友だちとイメージを共有したものを実現していくおもしろさに気づく
- ・イメージを膨らませ、考えながら、工夫して作る力が育つ。
- ・物事に積極的に取り組む力や、集中して取り組む力が身につく。
- ・いろいろな友だちや様々な人と関わる力やコミュニケーション力が高まる。
- ・人を思いやる力が育つ。
- ・自分たちで約束やルールを考え、友だちと共有しながら楽しんで活動できるようになる。

(4) 反省と考察

アプローチカリキュラムの内容は、特別なものではなく今までも各園で行われていたことである。子どもたちにつけていきたい力をきちんと整理し、それらを網羅すること、子どもたちが自発的に物事に組み入り遊んだりできるよう援助すること、それらに計画的に取り組むことがアプローチカリキュラムそのものだと考える。今回取り組んでいく中で、日頃の保育を見直し、その育ちが小学校1年生や次の学年にどうつながっていくか意識しながら保育をしていく大切さを改めて感じた。

(5) 今後の課題

今後、保育者間での連携と共通理解を深めたいうえで、学びに向かう力をつけていけるよう意識しながら保育に取り組んでいきたいと思う。また、小学校とも情報交換をしながらより一層連携を深めていきたいと思う。様々な遊びの経験が、「主体的・対話的で深い学び」という小学校、中学校、高校そしてその先までずっとつながっていくこれからの時代の学びのあり方の重要な基礎になっていくと考える。そしてそれが変化の激しい社会の中でも対応できる生きる力となっていくことを願っている。

2. 研究討議

(1) 発表内容に関する質疑応答

Q. 小学校との連携について

A. 本園では特に加茂小学校との連携を密に取っている。例えば、2学期の秋には小学校1年生の「あきみつけ」という生活科の授業の「秋の遊びブランド」というイベントに年長児が招待を受けて小学校1年生と遊んだり、遊びを教えてもらったりして交流を図っている。

3学期には授業参観・給食参観に行き、「小学校とはこういうところなんだ」と知ったり、給食の準備をしている姿、食べる姿を見たりすることで年長児にとって良い刺激になっている。また、3学期は小学校に向けて期待などが高まっている時期でもあるため、このような経験がとても良い交流となっている。

アプローチカリキュラムの編成をする時にも加茂小学校から年間指導計画を借りて編成の際に参考にした。また、編成後のアプローチカリキュラムを小学校の先生方に見てもらい、色々と意見をもらった。今後もアプローチカリキュラムを実践し、意見をもらいながら小学校との連携を密に取っていきたい。

(2) 草花遊び体験

①匂ってみよう

- ・クサギ：ビタミン剤やゴマのにおい。生活経験によりちがいがあがる。
- ・カキドオシ：ハーブのにおいがする。山のハーブと言われている。
- ・ヘクソカズラ：おならのにおい。花は可憐
- ・ドクダミ：独特のにおい。決していいにおいではないが、ドクダミ茶を作ったり、薬の原料になったりする。
- ・クロモジ：芳香があり、高級爪楊枝の原料となっている。虫除けや胃薬にもなる。
- ・ショウブ：お風呂に入れたりする。(菖蒲湯)

②口に入れて味をみよう

- ・ニガキ：にがい。
- (・エゴノキ：実の中にしびれる成分が入っているので見るだけ。)

③くっつけて遊ぼう

- ・カラムシ：葉の裏が白く、ワッペンのように服に付く。

④音を鳴らして遊ぼう

- ・クズ：クズの葉鉄砲をする。

⑤ゲームで遊ぼう

- ・オオバコ：オオバコの花柄を交差させて引っ張り合い「オオバコ相撲」をする。葉柄を引っ張るようにちぎって、出てくるすじ(維管束)の数で占う「オオバコ占い」をする。

⑥毛虫、髭にして遊ぼう

- ・エノコログサ：握って、上下に動く手品をする。二つに裂いて髭にする。

(3) 草花遊びとアプローチカリキュラム

①この遊びはアプローチカリキュラムのどれに該当するか

②つけることができる力と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関連

3. 指導助言》

現在、情報化社会やグローバル化が進んでいく中で教育が成すべき方向を考え直す必要がある。これからの社会が必要とする人材は何か。どんな力を子どもたちに付けさせたいか。一人一人の子どもが将来自分の能力を発揮して世界で活躍していくために教育はどうあるべきか。それらの点を考えた時に、幼稚園・保育所・小学校、またその先の中学校・高校・大学で一貫した理念で教育していくことが大事である。

イギリスのオックスフォード大学の教授による職業に関する未来予測では、10年後20年後には現在ある職業が半分になり、新たに職が生まれるとされており、子どもたちの半数は新たな職に就くという予測がされている。

また、AI（人工知能）による技術革新で今まで人間にしか出来ないとされていた作業や仕事がロボットでも可能になってきている。例えば現在、開発が進められている自動運転の技術が進めば将来的には無人で走る車が一般化され、タクシー、トラック、バスの職がなくなるのではないかと考えている。このように早いスピードで科学技術が進んでおり、今ある職業が無くなるのではないかとされている中「幼稚園や保育所の先生」という職業は必ず残るのではないかと考える。さすがにロボットの力だけでは子どもを教育することは不可能だろう。

新しい幼稚園教育要領に記されている「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の10項目は、幼児期終わりのゴールイメージであり、年長児から取り組んでも遅く3歳、4歳、5歳それぞれの時期にふさわしい遊びや指導の積み重ねが次の学年に繋がっていく。それらのことを常に意識し、考えて活動している発表だった。

子どもを育てるためには目標を持って指導することが大事であり、「この年齢ではこのようなことが出来るようになってほしい」などの思いを全職員で共通理解し、それぞれの発達段階に応じて指導する。このような学びの連続性が大切である。

これらのことを踏まえ、子どもたちを小学校へスムーズに繋ぐために必要であるのがアプローチカリキュラムであり、日頃の遊びの中の学びが小学校のどの学習、生活に生きるかを考えて作られている。楽しいこと、好きなことに集中していくことを通して学んでいくことがアプローチカリキュラムの学びである。それに対して、小学校に入学した子どもが生活や学びにスムーズに適応していくことを目指して編成されたのがスタートカリキュラムである。このカリキュラムの学びは自覚的な学びと言われている。自覚的な学びとは、集中する時間と休憩する時間の区別ができ、与えられた課題を自分のこととして受け止めて計画的に学ぶことである。

幼稚園では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」10項目のどれに結び付いているか、どんな力を付けていくかの方向性を確認しながら取り組むことが大切である。そして、幼児教育と小学校教育の接続として、アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムの繋がりを小学校と確認しながら連携することも大切である。

大山町教育委員会には幼児学校教育課があり、幼児教育も教育委員会が担当しているため保育所の様子を見に行くことがある。その際、年長児を見る時の視点は、①聞き取る力をもっているか ②積極的に学びに参加しているか ③人の話をしっかりと聞けるか である。ただ行儀よく座って

いるのが良いというわけではない。先生の話にどれだけ集中し、興味を持って自ら学ぼうとしているかが重要である。このようなことが年長児で達してほしい点であり、小学校教育に繋げていくことが望ましいと考えている。

社会の変化に対応し社会を創造できる人材を育てるために、小学校の新学習指導要領にも記されている「主体的学び」「対話的学び」「深い学び」、の3つの視点を大事にした指導がなされるべきであり、今回の発表の中の事例の中にこれらの点が含まれていた。

「主体的学び」とは、「やってみよう」という意欲をもち、先の見通しや展開を考え、振り返り、遊びと生活を発展させていくというものである。

ダンゴムシの事例では、

- ・ダンゴムシがどこにいるか予測して探す→育てたい→どのように育てるか本で調べる

⇒自ら学ぼうとする意欲

という形で発展していた。

「対話的学び」は自分の思いや考えを表現し、子ども同士で伝え合い考えを出し合う、協力するというもので、

- ・ダンゴムシがどこにいるのか→暗くて湿っているところ？好物があるところ？

→意見を出し合い相談しながら探す

- ・ダンゴムシはなぜ死んだのか→調べたり、考えたりしながら原因追求をする

- ・ダンゴムシの赤ちゃんの誕生→「小さいね」「可愛いね」友達と思いを共有する

という形で発展していた。

体験がいかに大事か、ということを表すことわざに、「聞いたことは忘れ、見たことは覚え、体験したことは獲得する」というものがある。中でも、「感動を伴った体験は一生忘れない」のである。

「深い学び」とは、物や人と出会って関わりを深めることで、いろいろなことを試しながら考えていく、試行錯誤の内に深く学んでいくというものである。

小学校で感じたことは、姿勢を保持出来ず45分間耐えられない子どもが多いことである。理想の姿勢としては「足はペタン、背中ピン、目は30cm離す」であるが5～10分で姿勢が崩れてしまう子どもが多い。これについては持久力、筋力不足、すぐに諦める心の弱さが指摘されており小1プロブレムの1つであると言える。幼児期から運動遊びを十分に行い丈夫な体を作ることも大切である。身体を動かすことは気持ちがいい、身体を動かすことが大好きだという子どもを育てることも力を入れてほしい。

小学校との連携は大事である。目の前の子どもたちをしっかりと育てることが10年後20年後の将来の社会を作ることに繋がる。各園で小学校との連携を進めて、子どもを育てる取り組みがなされることを期待している。